

氏名(国籍)	はん 韓	じょん すく 貞 淑	(韓 国)
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 甲 第 4874 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	森鷗外〈豊熟の時代〉研究 —現代小説から歴史小説へ—		
主 査	筑波大学教授	博士(文学)	浜 名 恵 美
副 査	筑波大学准教授	博士(学術)	秋 山 学
副 査	筑波大学准教授		加 藤 百 合
副 査	筑波大学名誉教授		名 波 弘 彰

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

森鷗外は長い沈黙の時代を経て明治四十二年に文学的活動を再開し、その後十年ほどの間に多数の作品を書いた。本論文の目的は、森鷗外文学研究上の謎となっている文学的活動の再開の理由と、さらに「現代小説から歴史小説へ」とジャンルを移行した理由について、当時の時代背景を踏まえつつ、小説形式と主題との関連で明らかにすることである。

本論文の構成は以下の通りである。

#### 序章

第一部 〈博士もの〉が志向したもの

第一章 博士の〈半日〉－「半日」論

第二章 「蛇」論－世代移行の問題を手がかりに

第二部 〈秀磨もの〉が実現したものとその限界

第三章 「かのように」に現われる〈父と子〉の葛藤－国家体制と学問の相克

第四章 「吃逆」「藤棚」における対話形式と主題表現

第三部 歴史小説の発見

第五章 「興津弥五右衛門の遺書」論－〈遺書〉という形式をめぐって

第六章 「阿部一族」論－さまざまな〈殉死〉をめぐって

第七章 「佐橋甚五郎」論－鷗外の〈新意〉をめぐって

結章

序章は、森鷗外の〈豊熟の時代〉という概念を定義し、先行研究を批判的に検討している。次に、初の歴史小説集『意地』(大正二年)が「新らしき意味に於ける歴史小説」であるとした鷗外の言葉に着目している。「新らしき意味」とは、〈博士もの〉、〈秀磨もの〉を通して行った主題と表現形式をいかに対応させるかとい

う模索から、やがて新たな人間像の表現に迫られた鷗外の意味表明であったとし、そのことを考察する意義について論じている。

第一部は、〈豊熟の時代〉初期における自然主義リアリズム形式の現代小説作品を扱い、後期の歴史小説とのつながりを探究している。

第一章は、「半日」（明治四十二年三月）を取り上げ、歴史小説集『意地』につながる鷗外の創作精神の解明をめざす立場から、鷗外の歴史小説に一貫するテーマといえる新旧の葛藤がこの作品でいかに描かれているのかを分析している。

第二章は、「蛇」（明治四十四年一月）を取り上げ、地方の旧家の内部に縮約されている〈近代〉の〈家〉の問題、つまり〈前近代〉から〈近代〉に移行する際の価値の動揺とその軋轢の問題が、どのように生成され、進展し、終結にいたるかについて考察している。

第二部は、〈秀麿もの〉を扱い、自然主義リアリズムの小説形式が放棄され、思想性を前面に出した対話形式が試され、家から国家へ主題が移行していることに注目している。しかし、対話形式では、国家を見つめる人間の内面を直叙しえないという限界があり、その結果、鷗外が歴史小説に行きつく過程が考察される。

第三章は、〈秀麿もの〉の第一作「かのように」（明治四十五年一月）を取り上げ、大逆事件や南北朝正閏問題などを視野に入れて、〈父と子〉の葛藤の様相を読み直している。

第四章では、〈父と子〉の葛藤の問題が、「吃逆」（明治四十五年五月）、「藤棚」（明治四十五年六月）において深化していることを解明している。

第三部は、『意地』に収録された三作品を扱う。「歴史小説の発見」の直接的動機と推測される乃木希典殉死事件を契機として、鷗外は〈前近代〉と〈近代〉の間で相反する価値観を一身に生き抜いた日本人像を発見し、自己が実現しようとしてきた〈近代〉が西洋のモデルに終始していたことを内省し、転換期における藩（幕府）・家・人間（個人）の相関を主題とするようになる。「歴史小説の発見」後も主題と小説形式の模索は続き、焦点となるのが主従関係である。近世の主従関係において従（家臣）の「意地」を主題化することは、現実の世界を生きる人間にとっての自由意志の表現による自己実現にほかならない。主人公にとっての「意地」の生き方は、現代の鷗外にとっての国家と個人の関係の喩として表現されたという立場から作品が考察される。

第五章は、「興津弥五右衛門の遺書」（大正元年十月）を取り上げ、特に〈遺書〉という形式に注目し、乃木希典の殉死との深い関連、乃木の遺書を含めた〈遺書〉という形式と歴史小説の関連、過渡期を生きるという問題意識の浮上を追究している。

第六章は、「阿部一族」（大正二年一月）を取り上げ、歴史小説集『意地』を構成する作品として、その一貫する主題は〈前近代〉の主従関係にある人間の生き方と過渡期への対応の仕方の追究であるという仮説を検証し、「阿部一族」の新たな位置づけを試みている。

第七章は、「佐橋甚五郎」（大正二年四月）を取り上げ、この作品とその典拠および関連史料とを対比し、また同時代のコンテクストに合わせて分析をおこない、この作品が歴史小説集『意地』の総題の下に収められた意味について再考している。

結章では、第一部から第三部までの成果をまとめ、さらに今後の展望について述べている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、明治四十二年以降の森鷗外の文学的再出発期をどう捉えるかという課題、および「現代小説から歴史小説へ」という鷗外の作家論的課題に取り組んだ意欲的な論文である。本論文の著者は、〈豊熟の時代〉の作品群を、(1)「博士」を視点人物＝主人公とする現代小説〈博士もの〉、(2) 五条秀麿を視点人物とする

現代小説〈秀磨もの〉、(3) 歴史小説に分けている。その上で、(1) と (2) が時代の変化を静態的に〈対立〉として主題化しているのに対して、(3) の歴史小説はまさに時代の変化を生きざるを得ない人間像そのものを動態的に主題化しているという立場にたっている。本論文の各章の論述は一貫してこの立場から分析され、またその分析と考察もこの著者の立場を支持するものとなっており、全体としてまとまりのある論考となっている。

森鷗外の文学的再出発期について、三好行雄は「小説形式の模索期」という論点を提起していた(1978年)。本論文の独自性は、この論点に着目し、「半日」、「蛇」から、〈秀磨もの〉四部作を経て、「歴史小説の発見へ」いたるまで、ジャンルを移行しながらも、ひとつの連続した文学活動であると見なし、作品分析と作家論を結びつけて論じ、三好行雄の論に内実を与えたことである。鷗外の作家論的課題に関しては、従来、「青年」、「灰燼」などの作品に描かれた自我確立の過程を基準にして、その結実を初期歴史小説三部作に求め、そこに絶対権力と個我の対立を捉え返すことで自我実現の意志あるいは自由を捉えることが通説とされてきた。これに対して、本論文は、自我確立の過程ではなく、明治から大正へと転換する激動の時代に、鷗外が、国家・家・個人(人間)が構成する「世界」と個人の間を問い直すことを小説の主題としようとしたと捉え、その展開について解明している。各章の問題設定はいずれも先鋭であり、新たな洞察を示し、著者の優れた資質を物語っている。とりわけ第二部と第三部の分析と考察は見事である。

以上のように、本論文は力作であるが、問題がないわけではない。「現代小説から歴史小説へ」いたるまで、本論文が取り上げなかった鷗外の作品が残っている。さらに鷗外と同時代の作家との関連の考察もより深めるべきであろう。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、森鷗外の〈豊熟の時代〉の作品群に新たな解釈の方向性を提示した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。